

屋久島の蝶類

The Butterflies Fauna of Yaku-island

by Iwao Iwamura

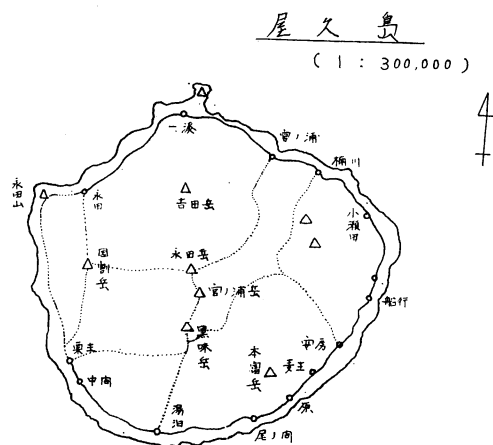
岩 村 巖

九州の南約80kmの海上に浮かぶ島、薩南諸島の一つに屋久島というのがある。面積にして500km²のまるい形をしたこの島は、いわゆる古い火山によって出来たもので、その中央部は2000m近い宮之浦岳、永田岳、黒味岳等の山々が連なる一大山塊をなしている。これら山々の頂上は海上からふきよせる気流の上昇のためにほとんど雲に被われている時が多く、したがって同島の年間雨量は3000mmをはるかに上まわるほどであるからして、そこに生えている植物相も極めて豊富である。海岸線にはガジュマル、アコウジュ、トベラ等の植物より構成されている亜熱帯や暖帯林がいたる所に繁茂しており、さらにこれより山地に入るにしたがって次第に寒地性のヤクスギ、ツガ、モミ等の常緑針葉樹林へと変化していく様子は実に興味のあることである。

このように多種多様の植物が見られることからして、これを食べて生活している昆虫の種類も多く、現在までのところ同島に産するものとして報告されているものは蝶に関しては9科、64種にも及んでいる。海岸の部落内には、ナガサキアゲハ、モンキアゲハを主体として、ミヤマカラスアゲハ、クロアゲハ等の蝶が多産し、また部落周辺の畑地やあれ地に足をふみこめば、ツマグロヒョウモンやタテハモドキが、防風林内にはスミナガンをはじめとしてクロコノマチョウやウスイロコノマチョウ等のジャノメチョウ科の種類や、ムラサキツバメジミ、ムラサキシジミ、アマミウラナミンジミ等のシジミチョウ類が相当数目につく。さらにこれより内部に入るにしたがって、インガケチョウやジャコウアゲハ等にまじって、珍品ヤクソマドリシジミ（キリンソマドリシジミの亜種）の姿も見うけられるし、地方によっては天然記念物に指定されているルーミスジミも得られている。

このように屋久島は小さな島に似合わず、蝶の種類数は多く、その分布という点に関してはいろいろと興味のある問題も多いので、チャンスがあれば一度調査に出かけてみようと思っていた所である。これからのべる採集報告は、本年の7月～8月にかけて夏期休業中を利用して同島をおとずれ、採集調査を行なった時の記録であるが、この島の分布解明に少しでも役にたてばと思ってい

る。



I. 日程およびコース (1965.7.24~8.4)

- 7月24日 急行“さつま”にて姫路出発
- 7月25日
屋久島宮之浦上陸、午後宮之浦一帯採集調査(泊)
- 7月26日
宮之浦→湊→深沢→宮之浦(泊)
- 7月27日
宮之浦→林用軌道→宮之浦→深沢→宮之浦(泊)
- 7月28日
宮之浦→楠川→小瀬田→安房(泊)
- 7月29日
安房→船行→安房(泊)
- 7月30日
安房→楠川→小瀬田→安房(泊)
- 7月31日
安房→麦生→原→尾ノ間(泊)
- 8月1日
尾ノ間→栗生→中間→湯泊→尾ノ間(泊)
- 8月2日
尾ノ間→平内→麦生→尾ノ間(泊)

。8月3日

東亜航空にて鹿児島に向い出発

[注] 地名の上に。印の付してある所は実際に採集調査を行なった場所である。

II. 採集結果

Hesperiidae (セセリチョウ科)

1. *Notocrypta curvifascia* C. et R. Felder (クロセセリ)

日本に産する多数のセセリチョウのうち、オキナワビロウドセセリ、オオシロモンセセリとともに南方系の蝶として有名な種類であるが、前二者ほどその分布が極端なことではなく、南の奄美群島(喜界ヶ島、沖永良部島、与論島からは未知)はもちろんのこと、これより以北のトカラ諸島、屋久島、種子島をはじめ九州全県下にわたって広く分布していることが知られている。

屋久島においても島内全体にわたって広く分布しているようであるが、本種の食草がハナショウガ、ゲツトウミョウガ、アオノクマタケラン等のミョウガ科の植物であり、これらが日のあたぬ湿地に生育するために、本種の姿も暖帯林内やそのまわりに多い。

九州地方においては第1化が5月~6月に出現し、以後2回の発生をくり返し、第3化が8月~9月に発生するようであるから、屋久島のような南の地方ではさらに発生回数が増加し、第4化まで出るのはないかと思われる。この度の採集諸査においてえられた個体は多分第2化と第3化の個体であろうが(相当破損した個体から新鮮な羽化後間もない個体までいろいろあった)、その個体数は意外に少なかった。以前大島に2度にわたって採集に出かけた際も、その採集された個体数が意外に少なかったことからして、もともとそれほど個体数の多いというような種類ではないのであろう。

なお本種は、日本がその分布の北限にあたり、国外では台湾、支那、インド南部、タイ、ビルマ、ジャワ、ボルネオ等、東南アジアに広く分布していることが知られており、いろいろの亜種に分類されている。

- (25.VII.1965. 宮之浦, 2♂♂, 0~2, +)
- (27.VII.1965. 宮之浦, 1♂, 1♀, 0~1, +)
- (28.VII.1965. 楠川, 1♂, 0, +)
- (29.VII.1965. 船行, 1♂, 0, 目撃, +)
- (31.VII.1965. 麦生, 1♂, 1, 目撃, +)
- (1.VIII.1965. 栗生, 1♂, 0, +)
- (1.VIII.1965. 湯泊, 1♂, 2, +)

2. *Choaspes benjaminii japonica* Murray (アオバセセリ)

アワブキ、ヤマビワ等のアワブキ科を食草とする本種は、東南アジア(ボルネオ、スマトラ、セレベスをはぶ

く)からインド、チベットにかけて広く分布しており、さらに北は支那より朝鮮、日本(北海道を除く)にまで及び、その分布範囲は相当に広い。わが国に産するセセリチョウ中においては、オキナワビロウドセセリとともに最大型種に属し、その飛び方も敏速で、なかなか飛躍中の個体を採集することは困難である。ただ朝と夕方には水辺に咲いている花などに吸蜜にやって来る個体が多く、そういう時には比較的簡単に採集することが出来る。本種の姿は、その食草の関係からしても、屋久島では草原や畑地等の日中光のよくあたるような所には見つけられず、主として部落内の防風林近くで、小川が流れているような所にしばしばその姿を見ることが出来る。

個体数は多くないが、その産地が局在しているようなことはなく、島内全般にわたって広く分布しているようである。

- (29.VII.1965. 船行, 1♀, 0, +)
- (29.VII.1965. 船行, 1♂目撃, +)
- (1.VIII.1965. 中間, 1♂, 0, +)
- (1.VIII.1965. 栗生, 1♀, 0, +)
- (2.VIII.1965. 平内, 1♀, 0, +)

3. *Pelopidas mathias oberthüri* Evans (チャパネセセリ)

多くない。

- (31.VII.1965. 麦生, 1♀, 1, +)

Papilionidae (アゲハチョウ科)

4. *Graphium sarpedon nipponium* Fruhstorfer (アオスジアゲハ)

島内のクス科植物のまわりをさかんに飛びまわっている姿を多数見かけたが、さらに道路上や部落内に出来た水たまりにも集まる習性があるらしく、そういう所では必ずといっていいほど本種の姿を見ることが出来た。

この度の採集品は、いずれも前後翅の青色帯が狭く型も大きな夏型であるが、新鮮なものが多かった。本種の年間発生回数は兵庫県等においては2回であるが、当地のような暖地では多化性であるらしく、早春より秋の終りまでほとんど連続的に成虫の姿が見られるとのことであるからして、その発生は4~6回にも及ぶものと思われる。

わが国に産する *Graphium* 属は、本種以外にはミカドアゲハ (*Graphium doson albidum* Wileman) のみであるが、両者は翅表斑紋にいちぢるしい相違があり、同定上まちがいをおかすことはまずない。さらに雌雄の判別においても、♂の後翅内縁に白色長毛を有する袋のあることから、一見して区別可能である。

日本以外における本種の分布は相当に広く、日本、朝鮮を北限として、西は支那中南部よりインド、セイロン

に、東はボルネオ、セレベス、ニューギニアに、さらに南はオーストラリア北部にまで及んでいる。

- (25.VI.1965. 宮之浦, 3♂♂, 1♀, 0~2, 卅)
- (27.VI.1965. 宮之浦, 3♂♂, 3♀♀, 0~1, 卅)
- (28.VI.1965. 楠川, 1♂, 0, 卅)
- (29.VI.1965. 船行, 1♂, 1♀, 0~1, 卅)
- (1.VII.1965. 中間, 1♀, 0, 卅)
- (1.VII.1965. 栗生, 1♂, 0, 卅)

5. *Papilio xuthus* Linne (ナミアゲハ)

わが国に産するアゲハチョウ科のうちの最普通種であり、日本全土にわたって広く分布しており、屋久島においても多数の姿を見うけることが出来た。特に小瀬田の海岸線に咲き乱れるオニアザミの群落には、次種キアゲハ(*Papilio machaon hippocrates* G. et R. Felder)とともに無数に近いほどの個体の群飛が見られた。

- (30.VI.1965. 小瀬田, 1♂, 1♀, 0~3, 卅)

6. *Papilio machaon hippocrates* C. et. R. Felder (キアゲハ)

日本における分布は前種より狭いが(南西諸島には本種の分布は確認されていない)、世界的に見た場合には前種よりはるかに広く、ヨーロッパ、アジア大陸より北アメリカ北部にまでその分布は及んでいる(前種は琉球、台湾、支那、小笠原等東部アジアの特産種)。

わが国においては一般に前種に比べて寒地帯に多く、兵庫県等の西日本においては前種に比べてはるかに山地性となる。屋久島においては海岸線においてもその姿を見うけることが出来るが、やはり山地に入るにしたがって多くなるようである。島内全体にわたって広く分布しているが、前種にくらべるとその個体数ははるかに少ない。

7. *Papilio protenor demetrius* Cramer

(クロアゲハ)

本種は朝鮮中南部、支那中南部より台湾、ベトナム、ビルマ、ヒマラヤ、インド北部のいわゆる東洋区と旧北区の両区にわたって広く分布していることが知られているが、わが国においても北海道を除く全域に産する。本種は次のモンキアゲハ、ナガサキアゲハと同様南方系の蝶であるから、一般に北部に行くにしたがってその個体数は少なくなり、東北地方の青森、岩手両県においては極めて少ない種類の一つとなる。

この種に関しては古くより遺伝的な有尾、無尾の両型があることが判明しており、このうち、日本、琉球、朝鮮等に産するものはいずれも有尾型のみである。わが国に産する *Papilio* 属のうち、本種と *P. macilentus* Janson は♂の後翅前縁に黄白色の性標があり、これによって雌雄の判明はよいである。後翅に表われる赤色紋は、一般に♀においてその発達がいちぢるしいが、こ

れには相当の変異があり、わが国に産する個体に関しては普通南方に産するものほどその発達がけんちよであるようで、奄美大島産のものに致っては、一見別種と見あやまる程度のももある。

屋久島に産する個体は大島産のものほどにはその赤紋の発達は大きくないけれども、近畿地方のものに比べればやはり大きいことがわかる。屋久島における本種の個体数は、後2種に比べればそれほど多いとはいえないが、それでも島内到的所にその姿を見うけることが出来、日中は部落内の日のさしている所よりも、むしろ林内に多く見うけることが出来た(このような習性は、アゲハチョウとキアゲハ、アオスジアゲハを除けば、屋久島に産する他のアゲハチョウ全体についていえることであるが)。同島における年間発生回数は5~6回程度であるらしく、早春から晩秋まで間断なく成虫の姿を見うけられるとのことで、部落内のミカン類には蛹・幼虫の姿も相当数目についた。

- (26.VI.1965. 宮之浦, 1♀, 2, 卅)
- (30.VI.1965. 楠川, 1♂, 1♀, 1~2, 卅)
- (31.VI.1965. 麦生, 2♂♂, 0~1, 卅)
- (1.VII.1965. 栗生, 1♂, 1, 卅)
- (2.VII.1965. 平内, 1♂, 1♀, 1, 卅)

採集個体数が以上のように少ないのは、産する個体数が少なかったわけではなく、筆者のたいまんによるものである。ついでに成虫以外の採集記録だけを記しておくことと次のようである。

- (27.VI.1965. 宮之浦, 6蛹, 2幼虫)
- (28.VI.1965. 楠川, 1蛹, 2幼虫)
- (30.VI.1965. 小瀬田, 2蛹, 2幼虫)
- (31.VI.1965. 麦生, 3蛹, 4幼虫)
- (2.VII.1965. 平内, 2蛹, 5幼虫)

8. *Papilio memnon thunbergii* von Siebold

(ナガサキアゲハ)

屋久島においてはモンキアゲハとならんでアゲハチョウ類の最普通種で、島内到的所でその成虫の姿を見うけることが出来るし、また野生しているミカン類や家の内にあっても放置されているようなミカン、ボンカン等の木には、その幼虫・蛹等が多数見うけられる。年間の発生は多化性で、早春3月より晩秋の10月まで冬期をのぞいて1年中その姿を見うけるようであり、この度の採集個体もいろいろの破損段階のものがみられた。

本種は次種モンキアゲハとともに、わが国に産する南方系アゲハチョウの代表種であり、現在近畿地方まで土着していることが知られており、ここ数年来の気温の上昇にもなつて年々北上をつづけているものと推定されている。

日本以外における本種の分布はボルネオ、ジャワ、ス

マトラ、ビルマ、タイ、南支、インド、パキスタン、イラン等動物分布における東洋区全体にわたっており、わが国はその分布の北限にあたっている。

本種は日本に産する *Papilio* 属中あっては、尾状突起を有しないというけんちよな特異性を有しているため、他の *Papilio* 属との同定にあやまりはまずないが、♀の白斑の発達程度には相当の変異があり、一般に南方に行くにしたがってその程度は大となるようで、この度の屋久島産のものは兵庫県（赤穂市）や岡山、広島あたりの北限近くでとれる個体に比べてはるかにその発達がいちじるしく、また前翅部に表われる赤紋もより大きく鮮明である。さらにまた♂においては、♀のような前翅基部の赤紋は発達しないのが普通であるのに、ときどきそれが表われる異常型が羽化するらしく、この度の採集品の中にも2頭、その個体が発見された。

なお本種に関しては、かつて兵庫県赤穂市において2頭採集された記録のあることを報告しておいたが、その後同地で発見された記録はなく、どうも一時的な発生にすぎなかったようで、土着している可能性はうすらいできたように思われる。

- (25.VII.1965. 宮之浦, 2 ♀♀, 1 ♂, 0~3, +)
- (26.VII.1965. 宮之浦, 4 ♂♂, 2~3, +)
- (27.VII.1965. 深沢, 7 ♂♂, 2 ♀♀, 0~3, +)
- (28.VII.1965. 安房, 1 ♀, 1, +)
- (29.VII.1965. 船行, 6 ♂♂, 2 ♀♀, 0~3, +)
- (31.VII.1965. 麦生, 1 ♂, 1 ♀, 1, +)
- (1.VIII.1965. 中間, 1 ♀, 1, +)
- (1.VIII.1965. 湯泊, 2 ♀♀, 1~2, +)
- (2.VIII.1965. 麦生, 1 ♂, 1 ♀, 1, +)

なお成虫以外の蛹・幼虫の採集記録は次のようである。

- (27.VII.1965. 深沢, 1 蛹, 幼虫)
- (28.VII.1965. 楠川, 5 蛹, 2 幼虫)
- (31.VII.1965. 麦生, 2 蛹, 3 幼虫)
- (2.VIII.1965. 麦生, 1 蛹, 2 幼虫)

9. *Papilio helenus nicconicolens* Butler

(モンキアゲハ)

前種同様年々北上をつづけている南方系アゲハの代表種で、かつては兵庫県においても稀な種とされていたものであるが、近年では県下あちこちで普通に見られるようになり、県南部地方においてはむしろ普通種に属するものの一つとなりつつあるのが現状である。

もちろん屋久島においても多産し、しかも、冬期以外一年中その姿を見うけることが出来るそうで、この島の特産ポンカンの害虫として知られている。後翅表面中央より黄白色の大型斑があり、その大きさも本邦産アゲハ類中最も大きいものの一つである。飛躍はかなり活発

で、飛やく中の採集はやや困難であるが、朝夕の吸蜜時には好んでサンダンカ、ブツソウゲ等の花に集まり、こういう時はように採集出来る。さらにまた、本種の蝶道は他のあらゆる *Papilio* 属よりも一段とはっきりしているために、日中でも場所さえ判明すれば、次々と多数の個体を採集することが出来る。

- (25.VII.1965. 宮之浦, 2 ♂♂, 2 ♀♀, 1~3, +)
- (26.VII.1965. 深沢, 1 ♂, 0, +)
- (27.VII.1965. 深沢, 7 ♂♂, 0~3, +)
- (28.VII.1965. 楠川, 5 ♂♂, 0~3, +)
- (28.VII.1965. 小瀬田, 1 ♂, 0, +)
- (29.VII.1965. 船行, 6 ♂♂, 2 ♀♀, 0~3, +)
- (29.VII.1965. 安房, 2 ♂♂, 1 ♀, 0~2, +)
- (30.VII.1965. 小瀬田, 1 ♀, 1, +)
- (31.VII.1965. 麦生, 1 ♂, 1 ♀, 0~1, +)
- (1.VII.1965. 中間, 1 ♂, 1 ♀, 0~1, +)
- (1.VIII.1965. 粟生, 1 ♂, 1, +)
- (27.VII.1965. 深沢, 2 蛹, 3 幼虫)
- (28.VII.1965. 楠川, 1 蛹, 2 幼虫)
- (30.VII.1965. 小瀬田, 3 蛹, 2 幼虫)
- (1.VIII.1965. 粟生, 1 蛹, 4 幼虫)

10. *Papilio maackii tutanus* Fenton

(ミヤマカラスアゲハ)

北方系の本種が屋久島のような薩南諸島に産することは大変きようみぶかいことである。日本に産するカラスアゲハ群は本種と (*P. bianor dehaanii*) の2種のみであるが、本種はカラスアゲハとちがいで、前後翅表面の青黄色帯の発達がけんちよなこと、また後翅裏面にも黄白色帯を有することなどにより（特に春型においてはこの特徴はいちじるしい）、一見して両者の区別は可能である。現在までのところ本種はアムール、朝鮮、満州に分布していることが知られており、日本においても北海道、本州、四国、九州、薩南諸島に分布している。これより以南の琉球、南西諸島には産せず、いわゆる旧北区の特産の視がつよいが、例外的に台湾では1頭採集された記録が残っている。

近畿地方においてはカラスアゲハに比してその個体数は極端に少なく、しかもその分布範囲もカラスアゲハに比してかなり山地性となるため、平地でその姿を見かけることはほとんどないのが事実である。にもかかわらず屋久島のような南方の地に、しかも平地で相当数の個体を見かけ、さらに同島においては近縁のカラスアゲハの姿を見うけることが出来るのは、どう理由によるのであろうか。本州より北海道にかけての北部の地方においては年2回の発生で、第1化の春型は小さく、翅表および裏面の青黄帯や黄白色帯の発達はけんちよであるが、第2化の夏型はややその発達が弱く、型も大型であ

ることなどからして、季節的な変異はけんちよであるが、屋久島のような南方地方においては他のアゲハ類と同様多化性の傾向が現われるらしく、その発生回数も年3～4回におよぶものと考えられ、季節的な変異もそれほど大きくはない様である。部落内の防風林やその周辺の花で成虫の姿を見うけることが多いが、時には海岸や川辺におりている個体を見かけたこともあった。

- (22.VII. 1965. 宮之浦, 1 ♀, 2, +)
 (31.VII. 1965. 麦生, 1 ♂, 1 ♀, 0～3, +)
 (1.VIII. 1965. 栗生, 1 ♂, 目撃)
 (2.VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♂, 目撃)
 (31.VII. 1965. 麦生, 2 ♂♂, 目撃)

Pieridae (シロチョウ科)

11. *Pieris rapae crucivora* Boisduval

(モンシロチョウ)

わが国における最普通種のシロチョウで、島内到处で多数の個体を目撃することが出来た。

12. *Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa et

Omoto (ツマベニチョウ)

♂の前翅先端に大きな橙色斑があるところからこの名が来たのであるが、本種は台湾、南支那、フィリピン、ジャワ、スマトラ等の東南アジアからインド、アフリカにかけて広く分布しており、産地ごとに多数の亜種に分かれている。その主なものをあげると次のようである。

Hebomoia glaucippe shirozui Kurosawa et

Omoto (九州南部, 種子島, 屋久島, 南西諸島)

subsp. *australis* Butler

(セイロン, 南印度)

subsp. *glaucippe* Linne

(ネパール～ビルマ)

subsp. *liukiensis* Fruhstorfer

(沖縄本島)

subsp. *cincia* Fruhstorfer

(八重山群島)

subsp. *formosana* Fruhstorfer

(台湾)

subsp. *aturia* Fruhstorfer

(マレイ半島)

subsp. *sumatrana* Hagen

(スマトラ)

subsp. *borneensis* Wallace

(ボルネオ)

subsp. *javanensis* Wallace

(ジャバ)

subsp. *philippensis* Wallace

(フィリピン諸島)

subsp. *celebensis* Wallace

(セレベス島)

もちろん屋久島に産する個体は subsp. *shirozui* であるが、同島においては各所に普通である。個体数は決して少なくないが、高い所をダイナミックに飛やくし、なかなか下へおりてこないで採集は困難である。ただ日中は木陰や日のあたらず水辺に下りて来る場合も多く、また部落内に咲いているサンダンカ、ブソウゲ等の花にも相当数の個体が飛来するので、そういう所を見つけると次々と多数の個体を採集することが出来る。したがって本種の採集を主目的とする場合には、飛んでいる個体を必死でおっかけるような採集方法はだめで、部落についたらば、まず部落全体が見下ろせるような高台に登って本種がどこに降りるかをしらべ、その下でまちぶせる採集法が最上である。本種のような高所を飛ぶ種類については、ユニークな♀個体によるオトリ採集法があるということを知り及んでいたので(南米産モルフォ等の採集方法としては実際に用いられているらしい)、蝶道下で破損した♀を使って♂をさそってみたが、わずかに1♂が近づいたにすぎなかった。

本種の食草はギョボク(フウチョウソウ科)であり、この木は屋久島の海岸線には到る所に見うけられる。宮之浦、尾ノ間、麦生の各部落内において見られたギョボクにはサナギ、幼虫、卵等が相当数見うけられたし、同じ木に産卵中の♀の個体も目についた。

○27.VII. 1965. 宮之浦, 2 蛹, 8 各齡幼虫, 8 卵採集
 (※31.VII. 1 ♀羽化, 29.VII. 1 ♂羽化)

○29.VII. 1965. 船行, 3 蛹, 2 終齡幼虫, 2 卵採集
 (※30.VII. 1 ♂羽化, 2.VIII. 1 ♂, 1 ♀羽化)

○31.VII. 1965. 麦生, 6 蛹採集
 (※1.VIII. 1 ♂羽化, 4.VIII. 1 ♂車中のため羽化失敗, 6.VIII. 2 ♂♂, 1 ♀羽化, 1 蛹羽化せず)

○31.VII. 1965. 尾ノ間, 2 蛹, 各齡幼虫, 卵発見
 (※6.VIII. 1 ♂羽化, 10.VIII. 1 ♂羽化)

卵は黄色～橙黄色で十数余の縦じまを有し、紡錘形であるが、孵化が近づくにつれて色が濃くなるらしい。また蛹には緑色のものと黄色味がかったものがあるらしいが、羽化が近づくにつれて透明化し、成虫形成による前翅の赤紋がすけて見えるようになる。なお採集幼虫のうち7月27日および7月29日採集の分に関して餌育を試みたが、次のような経過をたどった。

○27.VII. 採集個体(2終齡, 6.3～4齡幼虫)
 (※3.VIII. 2頭とも蛹化, 17.VIII. 1 ♂羽化, 19.VIII. 1 ♀羽化)のこり幼虫は帰るまでに大部分死亡、うち2頭のみ蛹化。

12.VIII. 前蛹—14.VIII. 蛹—29.VIII. 羽化, 1 ♂

16.VIII. 前蛹—17.VIII. 蛹—4.IX. 羽化, 1 ♀

○29.VII. 採集個体(2終齡幼虫)

31. VII. 前蛹—1. VII. 蛹—15. VIII. 羽化, 1 ♀

2. VIII. 前蛹—4. VIII. 蛹—20. VIII. 羽化, 1 ♂

この度の採集調査においては少なくとも毎日数頭の採集は可能であったが、特に宮之浦—湊間の深沢、宮之浦部落内、麦生等では多産し、深沢には多数の個体が次々と飛来する小川があり、また麦生には部落はずれに満開のブソウゲがあり、ここに多数の個体が飛来した。

(25. VII. 1965. 宮之浦, 1 ♂, 1 ♀, 0~2, +)

(26. VII. 1965. 深沢, 5 ♀♀, 6 ♂♂, 0~3, #)

(27. VII. 1965. 深沢, 14 ♂♂, 5 ♀♀, 0~3, #)

(28. VII. 1965. 小瀬田, 3 ♂♂, 1~2, +)

(29. VII. 1965. 船行, 2 ♂♂, 1 ♀, 0~2, +)

(29. VII. 1965. 安房, 1 ♀, 1, +)

(30. VII. 1965. 楠川, 2 ♂♂, 1~2, +)

(30. VII. 1965. 小瀬田, 4 ♂♂, 0~3, +)

(31. VII. 1965. 麦生, 9 ♂♂, 2 ♀♀, 0~2, #)

(1. VIII. 1965. 湯泊, 2 ♂♂, 1 & 2, #)

(2. VIII. 1965. 麦生, 2 ♂♂, 1 ♀, 0~1, #)

(2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♀, 2, +)

13. *Eurema hecabe mandarina* de l'orza

(キチョウ)

モンシロチョウとならんで、わが国に産するシロチョウ科中の最普通種で、島内到的所で多数の姿を見ることが出来た。

(28. VII. 1965. 小瀬田, 6 ♂♂, 2 ♀♀, 0~1, #)

(31. VII. 1965. 麦生, 2 ♂♂, 1 ♀, 0~2 #)

(2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♂, 1, +)

(1. VIII. 1965. 湯泊, 1 ♂, 1 ♀, 1~2, +)

14. *Eurema laeta bethesba* Janson

(ツマグロキチョウ)

この度の採集個体は小瀬田の小学校でえたものであるが、同地では前種キチョウと混生し、さきみだれる色とりどりの花の間を盛んに飛びまわっていた。本種の分布は北海道を除く日本全土にわたっており、これまで分布していないとされていた南西諸島においても近年採集された記録があり (26. III. 1961. 奄美大島, 湯湾, 1 ♂, 1 ♀, 0~1, Coll & poss I, I), これより以南の台湾、ビルマ、セイロン、ジャバ、フィリピン等にも分布していることからして、その分布範囲は相当に広いようである。

屋久島における本種の個体数はキチョウに比べるといちじるしく少なく、この度の採集旅行では小瀬田で2 ♂♂をえたのみであり、他の地ではその姿を見ることが出来なかったことからして、同島においてはその分布は極限しているようである。

一般に本種の夏型 (この度の採集品は前翅のとがりがやややにぶい夏型である) はキチョウと同定のあやまりを

おかしやすいものであり、飛躍中はその判明は困難であるが、手元でよくしらべてみると、その大きさがやや小さいこと、前翅外縁の黒斑が下部ではっきり切れていること等により判別は可能である。

(28. VII. 1965. 小瀬田, 1 ♂, 1 ♀, 0 & 1, +)

Lycaenidae (シジミチョウ科)

15. *Narathura japonica* Murray

(ムラサキシジミ)

日本には本種を含めて *Narathura* 属は2種産するが、そのいずれもが暖地性で、一般に北部に行くにしたがってその個体数は減少している。これまでのところ確実に産することの知られている北限は福島県であり、それ以北の東北地方各県下においては宮城県でいくらかの採集個体例がある以外、山形、秋田、岩手、青森各県では未だに採集されたという確実な記録がのこっていない。このように北方地方では大変に珍しい本種も、西日本以南の四国、九州各県および薩南諸島、南西諸島にいたっては極めて普通のシジミチョウの一種となり、屋久島においても林内の食草のまわりで多数の個体をみうけることが出来た。

本種の越冬態はムラサキツバメと同様成虫であるが、その年間発生回数は4~5回にも及ぶ (兵庫県下では年間3回の発生が見られ、そのうち秋期の9~10月にその個体数が最も多い) らしい。

(28. VII. 1965. 楠川, 1 ♂, 0, +)

(1. VIII. 1965. 湯泊, 1 ♀, 0, +)

(1. VIII. 1965. 栗生, 1 ♂, 0, +)

16. *Narathura bazalus turbata* Butlenr

(ムラサキツバメ)

日本に産する近縁種 (ルーミスシジミ, ムラサキシジミ) には尾状突起がなく、本種の同定上のあやまりはまざるものと思われるが、前2種に比してより南方系の蝶のため、近畿地方においても大変珍しいものである。しかし、九州、四国南部においては相当数の個体が毎年発生するようで、久留米あたりでは普通種とのことである。したがって屋久島にも多産するはずであるが、その個体数は以外に少なく、わずか3 ♂♀をえたにとどまった。九州あたりでは年3回~4回の発生をくり返しているようであり、発生時期に一致すれば相当数の個体がえられるのであろう。屋久島においては林内にムラサキシジミと同じ所で見られ、部落内の花にはおとずれないようで、そういう所では本種の姿はみられなかった。

(28. VII. 1965. 楠川, 1 ♂, 0, +)

(1. VIII. 1965. 中間, 1 ♀, 0, +)

(2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♀, 0, +)

17. *Lampides boeticus* Linne

(ウラナシジミ)

本種は移動性の大きい蝶で、毎年夏～秋にかけて日本各地で多数の本種の姿を見うけることが出来るにもかかわらず（北海道より南西諸島にわたって広く採集されている）、越冬中の個体（本種の越冬態には一定のものがなく蛹・成虫・幼虫等、いろいろの段階で越冬するらしい）が発見されているのは比較的温暖な千葉、伊豆大島、八丈島、静岡県、三重県、和歌山、高知県、九州諸島のみであり、他の諸県では未だに確認されていない。

屋久島においては、冬期成虫の姿が見られるところからして越冬土着していることは確実であり、多分本種の性質からして、それ以外にも蛹・幼虫の stage での越冬も行なわれているものと思われる。島内のマメ科植物のまわりには必ずその姿を見うけることが出来、その個体数も多い。

- (25. VII. 1965. 宮之浦, 1 ♀, 1, +)
- (28. VII. 1965. 楠川, 2 ♂♂, 3 ♀♀, 0~1, #)
- (28. VII. 1965. 小瀬田, 3 ♂♂, 2 ♀♀, 0~1, #)
- (31. VII. 1965. 麦生, 6 ♂♂, 4 ♀♀, 0~3, #)
- (1. VIII. 1965. 栗生, 2 ♂♂, 0~2, +)

18. *Nacaduba kurava septentrionalis* Shirozu

(アマミウラナミジミ)

本種 *kurava* は現在、大隅半島、サツマ半島を最北端として、これより以南の種子島、屋久島、トカラ諸島、奄美群島等に分布していることの知られている南方系の蝶類で、国外では台湾をはじめ、セイロン、南印度、ビルマ、スマトラ、マレイ半島、ジャバ等より、オーストラリアにわたって広く分布し、多くの亜種に分類されている。

本種の越冬態に関しては今のところ確実な記載はなく、奄美大島や屋久島においては春の3月から成虫の採集記録があるところからして、蛹の公算が一番大きい。現在までのところ、以北の九州南部においては1月～5月の間において成虫はもちろんのこと卵・幼虫の姿も発見されていないらしく、6月～7月にかけて成虫個体が急増するらしい。もちろん以南の屋久島、種子島、奄美大島においても春には個体数は少ないのであるが（1961年の筆者の奄美群島における採集記録においても、徳之島で1♂、1♀、大島で2♀、1♂の個体がえられたにすぎぬ）、出かければ必ず採集出来ることからして、九州南部における本種の定着は決定づけるためには、冬期から春期にかけての成虫の発見と、越冬中の個体（成虫・蛹・幼虫のいずれか）の発見が必要であろう。本種の食草は九州南部までは野生していることからして、その分布上の制限要因のうち最も大なるものは、冬期における温度のようである（福田）。

この度の採集調査においては、成虫・卵・幼虫等、いろいろの発生段階のものが多数見つかったが、その多産

地はいずれも部落周辺の防風林中に生えている食草モクタチバナ（ヤブコウジ科）の付近であり、♀はもちろんのこと、♂においても食草のまわりをはなれることは少ないらしい。したがってウラナミジミのように日あたりのよい林の外ではほとんどその姿を見うけることが出来なかった。島内到着所に普通であり、この度の採集旅行において見られた蝶のうち、その個体数は最も多かったが、中でも下屋久町麦生では多産し、林内の食草のまわりを多数の個体が飛躍していたし、産卵中の♀も発見された。

○成虫

- (28. VII. 1965. 楠川, 1 ♀, 0, +)
- (31. VII. 1965. 麦生, 42 ♀♀, 97 ♂♂, 0~1, #)
- (1. VIII. 1965. 中間, 1 ♀, 0, +)
- (1. VIII. 1965. 湯泊, 2 ♂♂, 0~1, +)
- (2. VII. 1965. 平内, 4 ♀♀, 2 ♂♂, 0~2, +)
- (2. VIII. 1965. 麦生, 18 ♂♂, 13 ♀♀, 0~1, #)

○幼虫・卵

- (31. VII. 1965. 麦生, 8 若齢～終齢幼虫, 8 卵)
- (2. VIII. 1965. 平内, 5 若齢～終齢幼虫, 6 卵)

19. *Zizeeria maha argia* Menetries

(ヤマトシジミ)

本亜種 (*argia*) は薩南諸島がその分布の南限であり、以南の大島群島には別亜種 (*ishigakiana*) を産する。島内到着所で見られ、しかもその個体数も多い。なお本種と近縁のシルビアンジジミ (*Zizina otis emelinade l'orza*) が本島に産することが報告されているが、この度の調査においては発見出来なかった。

- (29. VII. 1965. 船行, 6 ♂♂, 2 ♀♀, 0~1 #)
- (31. 1965. 麦生, 8 ♂♂, 1 ♀♀, 0~1, #)

20. *Everes ardiades hellotia* Menetries

(ツバメシジミ)

多くない。

- (27. VII. 1965. 宮之浦 3 ♂♂, 2 ♀♀, 0~2, +)
- (1. VIII. 1965. 中間, 1 ♂, 0, +)
- (2. VIII. 1965. 麦生, 1 ♀, 0, +)

Curetidae (ウラギンシジミ科)

21. *Curetis acuta paracuta* de Nicéville

(ウラギンシジミ)

わが国に産する Curetidae は本種のみであり、本州中部より奄美大島にわたって、主として日本列島の中南部に分布している。

屋久島においては各所でその姿を見うけることが出来たが多産するといった程度のもではなく、1カ所で数頭以上採集されたことはなかった。なお、この度採集された個体はいずれも前翅上部のとがりがにぶい、いわゆる夏型であり、秋型個体は発見出来なかった。

- (25. VII. 1965. 宮之浦, 2 ♂♂, 目撃, +)
 (26. VII. 1965. 深沢, 1 ♀, 0, +)
 (27. VII. 1965. 宮之浦, 1 ♀, 0, +)
 (1. VIII. 1965. 中間, 1 ♀, 0, +)
 (1. VIII. 1965. 栗生, 1 ♀, 0, +)

Danaidae (マダラチョウ科)

22. *Caduga sita nipponica* Moore (アサギマダラ)

現在までのところ日本において採集された記録のある

Danaidae は *Limnas chrysippus*,
Salatura genutia, *Caduga sita*,
Idea leuconoe, *Euploea mulciber*,
Radena similis, *Tirumala limniace*,

Tilumala hamata, の8種であるが, このうち確実に日本に土着していることの判明しているものは本種と *Ladena similis*

(リュウキュウアサギマダラ) の2種のみである。しかもこのうちリュウキュウアサギマダラは現在奄美群島(奄美大島と徳之島のみ)の特産種とされており, 以北のトカラ諸島, 薩南諸島をはじめとして九州, 四国, 本州, 北海道には産しないことが明らかとなっているので, これら地方においては本種が唯一のマダラチョウということになる。

本種は一般に南方に行くにしたがってその個体数が増加することが知られているが, この度の屋久島においては尾ノ間で1♂を目撃したのみで, 他には全然その姿を見ることが出来なかった。

近畿地方における本種の習性から判断して(本種はやや山地性の傾向があり, しかも飛躍がかんまんであるにもかかわらず, 山頂等の高所に舞上がる事が多く, 筆者はこれまで大山, 比良山をはじめ中部地方の山々で山頂に群生している本種の姿を目撃した経験がある), より山間部へ入れれば多産するのではないと思われる。

- (2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♂, 目撃)

23. *Limnas chrycippus* Linne (カバマダラ)

東南アジアからアフリカにかけて広く分布する南方系の蝶類で, 日本に近い確実な定着地は台湾である。台湾においては山地~平地にわたって全島に普通に産する本種も, わが国においてはここ数年前まではその採集例は極端に少なかった。これまでのところ新潟(1957. 8. 27. 1 ♀, 直江津市立替国分寺境内, 日本では最上の記録), 八丈島, 長野県, 静岡県, 大阪府, 和歌山県, 高知県, 佐賀県, 福岡県, 大分県, 宮崎県, 鹿児島県で採集記録があり, 屋久島においても次のような記録がのっている。

- 9. VIII. 1961. 宮之浦, 1 ♀
 ○ 8. VIII. 1954. 安房, 1 ♂, 1 ♀
 ○ 8. VIII. 1960. 栗生, 2 ♀♀

- 4. VIII. 1960. 麦生, 1 ♂
 ○ 9. VIII. 1961. 安房, 卵採集
 ○ 11~17. VIII. 1961. 安房, 幼虫採集

以上は1961年までの記録であるが, ここ数年, 南方諸島への採集者が激増した結果, その採集例も相当増加していることは十二分に考えられることであるが, 手元に適当な資料がないのでくわしいことは不明である。

本種の日本における発生状態, 生活史等に関しては現在まだ調査の段階であるが, 1961年に採集された栗生産の♀を鹿屋市で産卵, 飼育したところ, 8月の室内では18~21日で羽化するという(卵期2~3日, 幼虫期11~12日, 蛹期5~6日:福田)。また安房で1961. 9/VIII. 採集した卵からは, 11/VIII. 孵化, 20/VIII. 蛹化, 28/VIII. 羽化したという(山村)。一方奄美大島においては, 名瀬市で1959~60年にかけて越冬した(定まった越冬態はなく, 冬でも食草を食べて成長する)という報告があり(久保), より以南の与論島(1959), 沖永良部島(1949, 1960, 1961), 喜界ヶ島(1962)でも採集された記録があり, しかも年々増加の傾向にあることからして, 現在定着していないとしても, いずれ屋久島においても越冬中の個体が発見されるであろうことは明白であり, しかも同島においては食草として知られるトウワタ(ガガイモ科)も多くあり, この度の多産地“原”では卵(3卵), 幼虫(6頭)も発見されたことなどから考えて, それもそう遠いことではあるまい。

- (26. VII. 1965. 一湊, 1 ♂, 0, +)
 (31. VII. 1965. 原, 6 ♂♂, 4 ♀♀, 0~1, +)
 (31. VII. 1965. 原, 3 卵, 6 幼虫採集)
 (1. VIII. 1965. 中間, 5 ♂♂, 2 ♀♀, 0~1, +)
 (2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1 ♀, 0, 1 ♂, 2, +)

一湊, 尾ノ間においては部落内の路上で採集した個体であるが, 他には見あたらなかった。中間は海岸に生えている花に飛来していたものであり, 原は学校の校庭に植えられていたトウワタのまわりをゆっくりと飛んでいたものであるが, いずれも1カ所に多数の個体がみられ, 同じ部落内でも群生地をはなれるとその姿を見うけることが出来なかった。さらに原, 中間の多産地では交尾中の雌雄も中間で2例, 原で3例目撃しており, 同地では卵・幼虫も採集出来た。九州本島以北の地域に飛来する個体はそれほど多くないらしいが, トウワタの存在する所では飛来個体による F_1 が多発する傾向があること(福田), および食草のトウワタが大変強い植物で, 広くさいばいされている点などから考えて, 今後の本種の北上が見ものである。

Nymphalidae (タテハチョウ科)

24. *Argyreus hyperbius* Linne

(ツマグロヒョウモン)

本邦産ヒョウモン類のうち唯一の南方系の種であり、他のものとくらべるとその習性は大変ちがうようである。したがって他の種類が南の温暖な地方に行くにしたがってより山地性となり、その個体数も一般に減少して行くのに対して、本種はたとえ近年になって近畿地方においても秋期には必ず姿を見かけるようになったとはいえ、やはりその個体数は少なく、関東以北にいたってはきわめてまれな種類となる。しかし屋久島のような暖かい地方においては島内で最も普通にみられる蝶の一つとなり、到る所でその姿を見うけることができるが、中でも部落周辺の基地に最も多く、飛び方もそれほど早くないので、採集もさして困難なことはない。

本種の♀には前翅先端の中央部に、白帯をまじえた濃紺の斑紋を有し、これによって外見上での性の判明は可能であるが、この♀の特徴がカバマダラとある程度類似しているために、飛やく中の個体においてはカバマダラと見あやまることがしばしばある。本種はインド、パキスタン、インドネシア、マレー半島、タイ、ビルマ、ベトナム等の東洋区から朝鮮、支那等の旧北区の一部にかけて分布し、その分布北限は日本の津軽海峡にあるようである。

- (25. VII. 1965. 宮之浦, 1♂, 1♀, 0~1, 卅)
- (26. VII. 1965. 宮之浦, 3♂♂, 0~1, 卅)
- (26. VII. 1965. 一湊, 1♂, 1♀, 0~1, 卅)
- (27. VII. 1965. 宮之浦, 1♂, 2♀♀, 0~1, 卅)
- (28. VII. 1965. 楠川, 6♂♂, 1♀, 0~1, 卅)
- (29. VII. 1965. 小瀬田, 18♂♂, 4♀♀, 0~2, 卅)
- (29. VII. 1965. 船行, 2♂♂, 2♀♀, 0~1, 卅)
- (30. VII. 1965. 楠川, 1♂, 1, 卅)
- (30. VII. 1965. 小瀬田, 2♂♂, 0~1, 卅)
- (1. VIII. 1965. 栗生, 2♀♀, 0~1, 卅)
- (2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1♀, 1, 卅)

25. *Vanessa cardui* Linne (ヒメアカタテハ)

ほとんど全世界にわたって分布することの知られている本種ではあるが、日本においてはそれほど個体数の多い種類ではない。屋久島においても小瀬田と湯泊でそれぞれ1頭ずつ計2頭目撃したにすぎないことから考えて、それほど多くは産しないものと思われる。

- (29. VII. 1965. 小瀬田, 1♂?目撃, 卅)
- (1. VIII. 1965. 湯泊, 1♂?目撃, 卅)

26. *Vanessa indica* Herbst (アカタテハ)

本種は支那、日本、朝鮮等の旧北区より台湾、琉球、フィリピン、インド、セイロン、セレベス等の東洋区にかけて広く分布しており、現在4亜種に分類されているが、このうちわが国に産する個体は朝鮮、台湾等のものと同じ原名亜種の*V. indica* Herbstである。

本種の屋久島における個体数はそれほど多くなく、小

瀬田の海岸で1♀をえた以外、他に数頭を目撃したにとどまった。

- (30. VII. 1965. 小瀬田, 1♀, 1, 卅)
- (1. VIII. 1965. 尾ノ間, 1♂, 目撃, 卅)
- (2. VIII. 1965. 尾ノ間, 1♂, 目撃, 卅)

27. *Dichorragia nesimachus nesiotus* Fruhstorfer (スミナガシ)

本種は日本全土にわたって広く分布しており、国外では支那、ヒマラヤをはじめとして、フィリピン、ビルマ、マレー半島、ジャバ、セレベス、台湾等東南アジアに広く分布しているものであり、屋久島においても全島にわたって産することが、この度の調査で判明したが、1, 2の場所をはぶいては多産するというほどのことはない。本種の食草であるアワブキ、イヌビワ等のアワブキ科の植物は、屋久島の暖帯林においては優先種ではなく、ガジュマルやアコウの巨木の生えているすき間に出来た、やや日あたりのよい所でみられ、したがって本種も部落内よりむしろそういう食草の近くで見られる。また本種は食草から遠くへはなれるようなことはないらしく、食草の近くの樹液に集まって、特有の赤色の吸蜜管を出して盛んに蜜を吸っている姿にしばしば出くわしたが、そういう所を発見すると1カ所で相当数の個体がえられるであろう。本種は年2回の発生で、第1化は4~6月、第2化が7~8月に出現するとのことであるから、この度の採集品も第2化であろうが、大破個体が多く、特に♂は採集品のほとんどが2~3の大破個体であったところからして、屋久島のような暖地では相当早くから第2化が発生しているようである。

- (29. VII. 1965. 船行, 2♀♀, 5♂♂, 0~3, 卅)
- (1. VIII. 1965. 湯泊, 1♂, 1, 卅)
- (2. VIII. 1965. 平内, 1♂, 2, 卅)
- (2. VIII. 1965. 麦生, 1♀, 2, 卅)

28. *Hypolimnas misippus* Linne

(メスアカムラサキ)

本種は、わが国に産する *Damora sagana liana* Fruhstorfer (メスグロヒョウセン) と同様、雌雄によってその色彩斑紋が著しく相違していることで有名な種であるが、現在のところ本種の日本土着に関しては疑問視されている。本種は東洋の熱帯よりアフリカにわたって広く分布しており、日本に最も近い産地は台湾である。同島においては全島にわたって周年その姿を見うけることの出来る普通種であるが、日本においては例年7~10月にかけて北は青森県から南は奄美大島に至るまでいくらかの個体が散発的に採集されている記録がのこっているにすぎない。1930年より1955年までのものをひろってみると大体次のようなものがある。

- 1930年 (22. X. 1頭, 熊本県天草)

- 1931年 (18. X. 1 ♂, 長崎市外岩屋山)
- 1937年 (20. X. 1 ♂, 静岡県上香貫)
(22. X. 1 ♀, ")
- 1938年 (6. X. 1 ♀, 宮崎県宮崎市)
- 1939年 (月日不明, 個体数不明, 青森県)
- 1941年 (月日不明, 1 ♀, 広島県三原市)
- 1942年 (月日不明, 個体数不明, 青森県)
(" , " , 神奈川県)
- 1946年 (7. VIII. 1 ♂, 東京都)
- 1947年 (? . VII. 1 ♂, 徳島県板野郡北島町)
(7. VIII. 1 ♂, 久留米市山城)
- 1949年 (4. X. 1 ♂, 徳島県勝浦郡中津峰)
- 1950年 (11. VII. 1 ♂, 新潟県直江津市)
(月日不明, 1 ♂, " 中頸城郡八千浦村)
(20. X. 1 ♂, 静岡県三島市祇園山)
- 1951年 (? . VIII. 1 ♂, 福岡県北九州市)
(? . X. 1 ♂, " 北九州市戸畑)
(30. VIII. 1 ♂, 宮崎市天神町)
- 1952年 (月日不明, 1 ♂, 愛媛県)
(24. VIII. 1 ♂, 長崎市権現山山頂)
(15. X. 1 ♀, 大分県北海部郡佐賀町)
- 1953年 (23. VIII. 1 ♂, 佐世保市鳥帽子岳)
(17. X. 1 ♂, " 天神山)
- 1954年 (14. X. 1 ♂, 三重県熊野市木本町)
(25. X. 不明, 福岡県北九州市若松)
- 1955年 (3. X. 1 ♂, 長野県諏訪市立石山)
(7. VII. 1 ♂, 徳島県海部郡牟岐町)
(15. VIII. 1 ♂, 福岡県八女市)
(20. X. 1 ♀, 宮崎市野尻町大塚原)
(18. X. 1 ♂, ")
(24. X. 1 ♂ 目撃, 鹿児島市山下町)

これら採集報告を見るとわかることであるが、1950年以後、その採集された個体数が年々増加しているようで1965年以後の記録が手元にないために以後のようすはわからないけれども、相当数の個体が全国、そのうちでも特に九州各県においてえられているものと推定される。

屋久島においても過去15年間に採集されたと発表されている個体は次の8頭(4 ♂♂, 4 ♀♀)であるが、ここ2, 3年間の大がかりな調査(鹿児島昆虫同好会が主として鹿児島県を中心に南方系迷蝶の長期計画による調査を行なっている)において、まだ発表されていないが相当数の個体を目撃、あるいは採集されているようである。

- 12. VIII. 1950. 宮之浦, 1 ♂
- 6. VII. 1957. 小島, 1 ♂ 目撃
- 7. VIII. 1957. 安房, 1 ♂, 1 ♀
- 7. VIII. 1960. 栗生, 1 ♂

- 8. VIII. 1960. 栗生, 3 ♀♀

したがってこの度の調査においても相当数の個体が採集出来るであろうということは十分予期出来たことであるが、予想以上の成果を上げることが出来た。特に上屋久町、楠川、小瀬田両村にはその個体数が多く、採集された個体も羽化したばかりと思える新鮮なものばかりであった。そのうちでも特に小瀬田の海岸にはオニアザミが群生しており、この花にアゲハとともに多数の本種が飛来することが判明した。ただ同じ所に多数の♂が同時に飛んでいることはなく、1頭採集するごとに次の個体が飛来するところからみて、♂の占有性が見られるのではないかとも思われる。

本種の日本定着に関してはいろいろと調査されているにもかかわらず、いまだにはっきりとしたことが判明していない。本種の幼虫が冬の寒さに弱いこと、また食草であるスベリヒユが九州南部においては南薩、南隅の一部を除いては枯死することからして、幼虫で越冬することは不可能である。サナギ・卵等の越冬もまず不可能であり、一番可能性の大きい成虫においても冬の寒さに弱く、1~6月の間において成虫の採集記録がないことなどからして、少なくとも九州以北においては土着の可能性はなく、今のところこれまでの採集個体は、例年6~10月にかけて南方より飛来する親個体か、またはこれらによって生まれ、2次的に増殖したF₁であると考えるのがだとうのようである。したがってこの度の採集品においても、多分南方より飛来した親個体によるF₁であろうと思う。屋久島より以南の奄美群島、琉球等においても今のところ迷蝶として取りあつかう傾向がづよいが、すぐ南の台湾には多産するところからして、いずれ近いうちに土着が確認されるのではないかと思われる。

- (28. VII. 1965. 小瀬田, 8 ♂♂, 2 ♀♀, 0, +)
- (30. VII. 1965. 楠川, 5 ♂♂, 1 ♀, 0~1, +)
- (30. VII. 1965. 小瀬田, 3 ♂♂, 1 ♀, 0~1, +)
- (26. VII. 1965. 一湊, 1 ♀, 0, +)

29. *Neptis aceris intermedia* W. B. Pryer

(コミスジ)

日本本土においてはごく普通に産する種類であるが、屋久島においては多くなかった。

- (1. VIII. 1965. 栗生, 1 ♂, 0, +)

30. *Precis almana* Linne (タテハモドキ)

九州の佐多岬や薩摩半島を北限とし、これより以南の各島々に土着していることの知られている種類であるが、屋久島においては少なかった。食草(イワダレソウ)の関係から畑地に多く見うけられるようであるが(奄美大島等においてはこの傾向は、はっきりと見うけられ食草のまわりををびまわっている)、個体数が少なかつた結果、はっきりと確認は出来なかつた。

- (31. VII. 1965. 麦生, 1 ♂ ♀?, 目撃, +)
 (1. VIII. 1965. 中間, 1 ♂ ♀?, 目撃, +)

Satyridae (ジャノメチョウ科)

31. *Mycalesis gotama* Fruhstorfer

(ヒメジャノメ)

32. *Yptima argus* Butler

(ヒメウラナミジャノメ)

上記2種とも島内到的所でその姿を見うけることが出来、同島における最も多いジャノメチョウとなっている。

33. *Melanitis phedima oitensis* Matsumura

(クロコノマチョウ)

本種は日本においては屋久島がその分布の南限で、これより以南のトカラ諸島、奄美群島には産しない。わが国においては次種ウスイロコノマチョウにくらべてその採集される範囲はせまく、屋久島、種子島、九州、四国、本州(山口、広島、島根、岡山、和歌山、奈良、三重、兵庫、大阪、京都、滋賀、愛知、静岡)に産することが知られているが、九州中南部、四国には普通である以外、他の地域では一般にまれな種類である。本種の越冬態は次種と同様ジャノメチョウ科ではめずらしく成虫であり、暖地では年数回、寒地では通例年2回の発生がみられる。屋久島のような南限に近い所では第1化は6月頃現われ、以後1~2回の夏型の発生をくり返す、からして7~8月にかけては、ちょうど第1化と第2化の間になり、大破個体から羽化直後の新鮮なものまで各段階のものが見られることになる。本種は路上や畑等の日あたりの良い所にはその姿を見うけることはほとんどなく、主として部落内に天然のまま保護されている防風林(屋久島では部落の周辺には必ず存在する)において相当数見うけることが出来る。しかし同じ林の中でも、あまり下草が生い繁り、湿気の多いような所には決して本種の姿をみうけることが出来ず、日のさしこまぬ下草の少ない落葉でしきつめられているような乾燥した林に、しかも1カ所にかたまってみうけることが出来る。国外においては支那、スマトラ、フィリピン等の東南アジアにその分布が知られている。

屋久島においてはどの部落の防風林中でも見られるが、その個体数は決して多いとはいえない。足おとにおどろいてとび出す個体は他の蝶とちがって遠くへとびさることはないが、たれ下がる木やツタ、その間にはりめぐらされているクモの糸等がじゃまになって比較的採集は困難である。北部の宮之浦、楠川、小瀬田、一湊等においては第1化の生きのこりと思われる大破、中破個体のみであった本種も、南部の栗生、尾ノ間、小島、中間、湯泊等においては第1化の大破個体にまじって、羽化して間がないと思われる第2化の新鮮な個体が見ら

れ、同じ所にウスイロコノマの夏型がえられた。

- (29. VII. 1965. 船行, 2 ♂ ♂, 2 ♀ ♀, 1~3, +)

- (31. VII. 1965. 中間, 1 ♂, 2 ♀ ♀, 0~1, +)

- (31. VII. 1965. 湯泊, 1 ♀, 0, +)

- (31. VII. 1965. 栗生, 1 ♂, 1 ♀, 0~1, +)

34. *Melanitis leda* Linne

(ウスイロコノマチョウ)

前種クロコノマに比べて、その分布はより南方にかたより、奄美大島、徳之島、トカラ諸島には確実に産することが知られているが、それ以外の喜界ヶ島、沖永良部島、屋久島、種子島、九州南部等においては越冬個体が発見されない(本種は前種と同様成虫で越冬する)ことや、夏期にくらべて秋型がきよくたんに少ないこと等の理由によって、定着していることが疑問視されている。

また本種は大変に移動性が強いことが知られており、前種クロコノマよりもはるかに北方の青森県、岩手県、秋田県の東北地方をはじめ、東京、神奈川、千葉、八丈島、新瀨、静岡、京都、兵庫、三重、和歌山、山口、四国各県、九州各県下で採集された記録がのこっているにもかかわらず、同一地方で毎年採集されるようなことがないことからして、強い移動性によって飛来した母蝶による一時的な偶発であることは確実である。屋久島においても例年相当数の個体が採集されているが、いまだに春期の越冬個体と考えられる個体が発見されていないことからして、このことが定着している可能性が十分にあると考えられながら、はっきりとそう断定出来ない一番大きな理由である。

- 18. XI. 1953. 個体数不明, 小島

- 19. XI. 1953. " , 栗生

- 4~5. VIII. 1957. 7 ♂ ♂, 1 ♀, 栗生

- 6. VIII. 1957. 1 ♀, 宮之浦

以上が1961年までに報告されている個体数であるが、以後相当数の個体が採集されているであろう。

本種はクロコノマと同様、日陰の乾燥した所にみられ、夕方には路上に出て来たり家の灯火に飛来することもしばしばある。前種クロコノマに比べてその個体数は相当少ないようで、この度の調査において発見された近縁種2種のうち本種はわずかに2頭のみであった。なお本種は北部の地域(宮之浦、一湊等)にはみつからず、栗生、湯泊等の部落内の防風林中に見られるようである。

- (1. VIII. 1965. 栗生, 1 ♂, 0, +)

- (29. VII. 1965. 船行, 1 ♂, 0, +)

この度の採集調査において採集、または目撃出来た種類は以上である。現在までに屋久島において土着していることが確認されている種類は9科54種にも及んでいるにもかかわらず、この度の調査において実際に採集され

たものは8科34種にすぎなかったのは大変残念である (Table 1 参照)。しかし、これらの中には現在大いに話題になっている種類も2, 3は含まれており、またそれらの卵・幼虫・蛹等もある程度採集出来たことなどからして、ある程度の採集成果はあげられたものと思われている。この度の採集結果がこのように種類数において少なかったのは、その期間が夏期の (一般に成夏には蝶の個体数は減少する) しかも2週間ほどの間にかぎられ、さらに日程の関係もあって調査地域が海岸線にかぎられ、ルーミスジミ、ヤクシマルリシジミ等の産すると思われる山間部へは立ち入らなかったこと等が原因しているようである。これらの不備な点は今後さらに回を重ねて同島をおとずれることによりおぎなっていくと思っている。なお参考までに現在屋久島に産するものと考えられている残りの種をあげてみると、次のようなものがある。

Hesperidae (セセリチョウ科)

1. *Potanthus flavum* Murray (キマダラセセリ)
2. *Polytremis pellicida* Murray (オオチャバネセセリ)
3. *Isotheon lamprospilus* C. et R. Felder (ホソバセセリ)
4. *Parnara guttata* Bremer et Grey (イチモンジセセリ)

Papilionidae (アゲハチョウ科)

5. *Graphium doson albidum* Wilema (ミカドアゲハ)
6. *Byasa alcinous* Klug (ジャコウアゲハ)

Pieridae (シロチョウ科)

7. *Pieris melete* Menetries (スジグロシロチョウ)
8. *Anthocaris scolymus* Butler (ツマキチョウ)
9. *Colias erate poliographus* Mothulsky (モンキチョウ)

Lycaenidae (シジミチョウ科)

10. *Chrysozephyrus ataxus yakusnimaensis* Yazaki (キリンヤマドリシジミ)
11. *Lycaena phlaeas daimio* Seitz (ベニシジミ)
12. *Zizina otis emelina* de l'Orza (シルビアンシジミ)
13. *Celastrina argiolus ladonides* de l'Orza (ルリシジミ)
14. *Celastrina puspa umenonis* Matsumura (ヤクシマルリシジミ)
15. *Celastrina albocaerulea sauteri* Fruhstorfer (サツマジミ)
16. *Everes lacturnus kawaii* Matsumura

(タイワンツバメシジミ)

17. *Panchala ganesa loomisi* Pryer

(ルーミスジミ)

Libytheidae (テングチョウ科)

18. *Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer

(テングチョウ)

Nymphalidae (タテハチョウ科)

19. *Damora sagana liana* Fruhstorfer

(メスグロヒョウモン)

20. *Fabriciana nerippe* C. et R. Felder

(オオウラギンヒョウモン)

21. *Kaniska canaca no-japonicum* von Siebold

(ルリタテハ)

22. *Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer

(インガケチョウ)

Satyridae (ジャノメチョウ科)

23. *Neope goschkevitschii* Menetries

(キマダラヒカゲ)

[注]

本文中の採集記録中に見られる0, 1, 2, 3の数字は個体の鮮度を表わし、また、+, Ⅱ, Ⅲ等の記号は産地における個体数を示しており、それぞれ0 (新鮮), 1 (小破), 2 (中破), 3 (大破), + (小さい), Ⅱ (普通), Ⅲ (多産)の意味である。

table 1

屋久島産蝶類の科別種類数

科名	記現在までの種録			本調査による採集品		
	A	B	C	A	B	C
1 Hasperidae	7	0	0	3	0	0
2 Papilionidae	9	1	1	7	0	0
3 Pieridae	7	2	0	4	0	0
4 Lycaenidae	14	1	0	6	0	0
5 Danaidae	1	2	1	1	1	0
6 Curetidae	1	0	0	1	0	0
7 Nymphalidae	10	3	0	6	1	0
8 Libytheidae	1	0	0	0	0	0
9 Satyridae	4	1	0	3	1	0
計	54	10	2	31	3	0

A : 土着種 B : 土着疑問 C : 迷蝶

参 考 文 献

1. 福田晴夫(1958) : 屋久島の蝶類採集報告 SATSUMA, 19: 3~13
2. 永井彪・東兼道(1956) : 屋久島採集雑記

- SATSUMA, 12 : 20~22
3. 久保邦照(1960) : カバマダラに関する知見(Ⅰ)
SATSUMA, 23 : 44~48
 4. 鹿児島昆虫同好会(1961) : 鹿児島県の迷蝶
SATSUMA, 27 : 1~66
 5. 久保邦照(1960) : カバマダラに関する知見(Ⅱ)
SATSUMA, 26 : 20~23
 6. 上宮健吉(1962) : 屋久島採集報告

- SATSUMA, 33 : 13~14
7. 福田晴夫・田中洋(1962) : 鹿児島県の蝶類
 8. 田中洋(1963) : 1961年の屋久島のカバマダラはどうなったか。
SATSUMA, 35 : 9~10
 9. 鹿児島昆虫同好会(1961) : 鹿児島県産蝶類文献目録
 10. 白水隆(1961) : 日本産蝶類分布表
 11. 白水隆(1961) : 原色昆虫大図鑑Ⅰ : 1~83
 12. 白水隆(1962) : 原色台湾蝶類図鑑

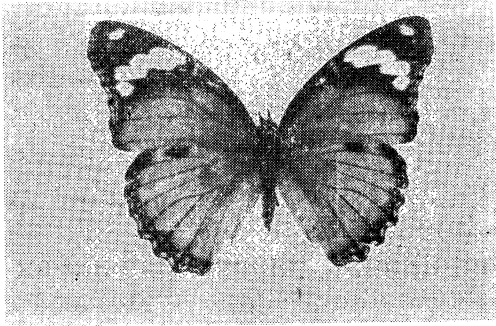


Fig. 1

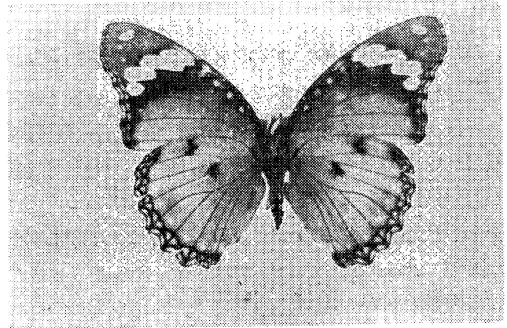


Fig. 2

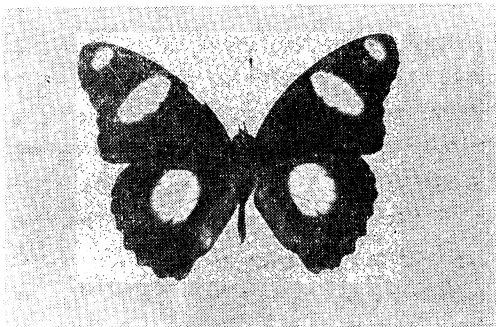


Fig. 3

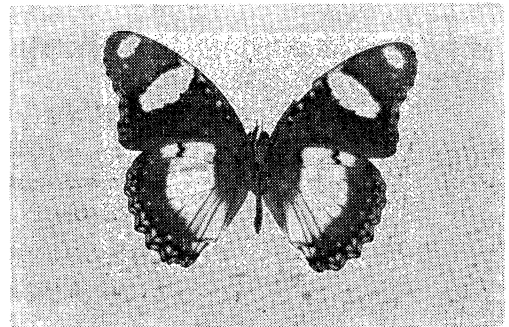


Fig. 4

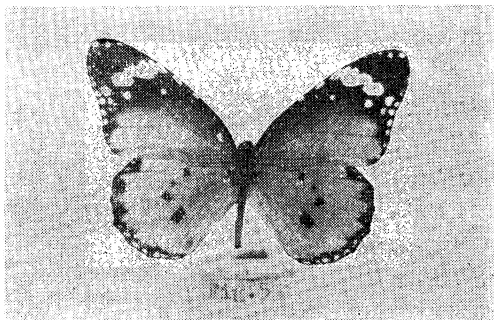


Fig. 5

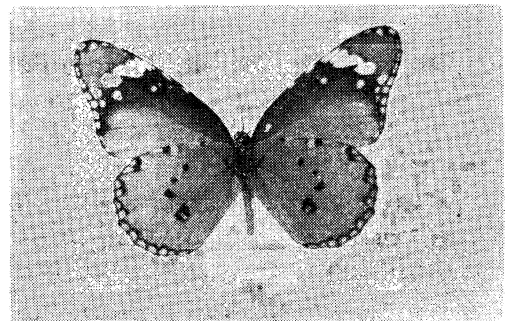


Fig. 6

(以下 p. 358~)

(以下 p. 347より)

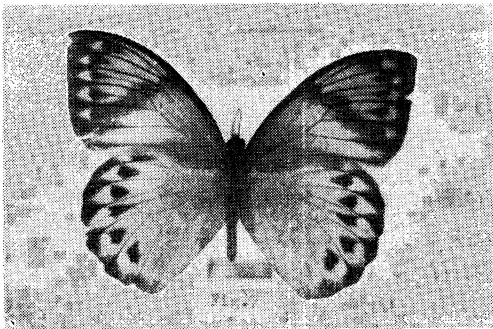


Fig. 7

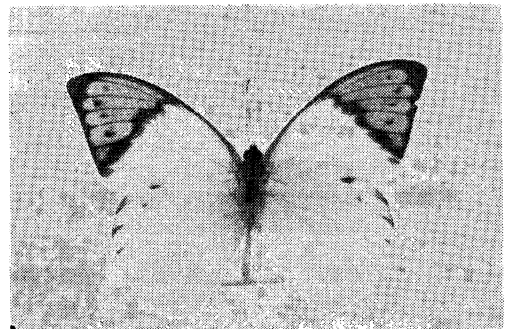


Fig. 8

Fig. 1 : *Hypolimnas misipps* Linne (♀表)

Fig. 2 : *Hypolimnas misipps* Linne (♀裏)

Fig. 3 : *Hypolimnas misipps* Linne (♂表)

Fig. 4 : *Hypolimnas misipps* Linne (♂裏)

Fig. 5 : *Limnas chrysippus* Linne (♂表)

Fig. 6 : *Limnas chrysippus* Linne (♂裏)

Fig. 7 : *Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa et Omoto (♀表)

Fig. 8 : *Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa et Omoto (♂表)